

あなたへの「聖書メッセージ」 【The 聖書】

● テモテへの手紙 第二 3章14節～17節 ※ [新改訳聖書・使用]

さて今日は、「聖書」と共に歩み、「聖書」から知恵を与えられ、救いをいただき、〈神の人〉として整えられていった一人の人を、紹介しましょう。

使徒パウロによって、「愛する忠実な子」、あるいは「信仰による真実のわが子」と言われた、パウロのよき同労者、**テモテ**です。

テモテのお父さんはギリシャ人。お母さんはユダヤ人で、“ユニケ”と言いました。おばあちゃんは、“ロイス”と言いました。

テモテは、これらの人たちから、神のことば・みことばの真理を学んできましたし、テモテ自身、幼い頃から、「聖書」に親しんできたのです。

聖書はテモテに、知恵を与えてくれました。

聖書はテモテに、キリスト・イエスに対する信仰による救いを受けるように、導いてくれました。救いへと、導いてくれました。

聖書に日々、親しみながら、教えられ、戒められ、まちがった時には矯正され、又、義のための訓練を与えられてきました。

そして、フルタイムの献身者、神の人として召されていった後も、聖書を通して、主の働きのためにふさわしい、十分に整えられた者と、されていったのです。

今回のみことばの個所に、「聖書」ということばが、3回出てきていますが、テモテが手にした「聖書」というのは、どのようなものだったのでしょうか。

私たちが今、手にしているような形の聖書だったのでしょうか。そうではなさそうですね。

少し、「**聖書**」そのもののことを、見ていくことにしましょう。

私たちの教会、**阿武山福音自由教会**が属しています、「日本福音自由教会」の〈信仰箇条〉の第1条を見てみますと、次のようになっています。

[第1条] 旧新約聖書を、原典において、何ら誤りなき、靈感された神の言（ことば）であり、人間の救いについて、神のみこころを完全に啓示し、すべてのキリスト者の信仰と生活の神的、究極の権威であることを、信じる。

「旧新約聖書を、原典において、何ら誤りなき」とあります。

旧新約聖書の「原典」は今、どこにあるのでしょうか。

旧約39巻、新約27巻、旧新約合わせて66巻。

実は、旧新約66巻のどの一つの書も、原本は、残念ながら、残されてはいません。今、私たちが目にしている聖書の、すべての文章は、原典の文章から翻訳されたものではありません。

聖書翻訳の原文となったものは、後世の写本によって伝えられてきたものです。

後世の写本と言っても、それほど古い時代までさかのぼることは出来ません。何しろ貴重な羊皮

紙やパピルスなどに、書き写していくわけですが、数多くは作れませんし、古くなると、風化してダメになっていってしまいます。

そうなる前に、新しく書き写され、古くて使いものにならなくなったものは、処分されていくわけですから、もともと多くはないのです。

ましてや、庶民のものではありません。修道院のような所で、書き写されていったわけです。勿論、すべては手書きです。

ドイツのグーテンベルクが、〈活版印刷術〉を発明し、金属の活字を作り、手動の印刷機で、一枚一枚印刷していった、「聖書」を出版したのは、1450年頃のこと、今からやっと560年前のことなのです。

それでさえ、印刷されたものはわずかで、庶民のものではなかったのです。

旧約聖書の写本として、現在残っていますのは、西暦930年の「アレppo写本」と、1009年の「レニングラード写本」です。約1000年前のもので、

イエス・キリストの誕生が2000年前ですから、1000年前というのは、随分新しいものなのだということがわかります。紀元10世紀の写本なのです。

私たちが、今手にしている旧約聖書の本文は、これら、「アレppo写本」と「レニングラード写本」の本文（ほんもん）・本文（ほんぶん）をもとにしています。

これらの写本を、慎重に比較・研究しながら、原典の原文が、こうであったに違いないと確定されていきました。

そのようにして、出来上がっていった本文（もん）・本文を、「マソーラー本文」（ほんもん）と呼んでいます。私たちが、今手にしている旧約聖書は、この「マソーラー本文」に基づいて、日本語に翻訳されたものなのです。

一方、新約聖書の写本は、旧約聖書より古く、紀元4世紀のものまでさかのぼることが出来ます。「シナイ写本」と呼ばれるもので、新約聖書のすべてを含んでいます。「ヴァチカン写本」と呼ばれるものは、「ヘブル書」の最初の部分までのものが残されています。それにしても、イエス・キリストの誕生より400年も後のものであるわけです。

聖書の各書は、1000年以上もの時をかけて、多くの筆記者によって、順次書き記され、成立していきました。1000年以上かかって、出来上がっていきました。

今から1000年前といえば、日本では〈平安時代〉です。いうならば、紫式部と三浦綾子が一冊の本の共同の著者である—— というようなものなのです。

一番最初の頃は、口伝（くでん）・口伝で伝えられていき、それが徐々に文書化されていったわけですが、最も古い口伝の内容は、紀元前の13世紀～11世紀にまでさかのぼるのです。

最初の文書化がなされたのは、預言書の「アモス書」ですが、それでも、紀元前8世紀のことです。「モーセ五書」（創・出・レビ・民・申命記）は、紀元前400年頃にまとめられたようです。

最初に記されたものが、それほど古いもので、しかも、一巻も、原典が残ってはいないのです。

そして、たかだか、今から1000年前、日本でいえば平安時代の頃に書かれた写本をもとにしているのです。本当に、大丈夫なのでしょう。

「電信ゲーム」じゃないけれど、書き写している間に、いろんな写しまちがいが出てきて、原典とはかなり違ってきている、というのではないのでしょうか。

「福音自由教会」〈信仰箇条〉の、「旧新約聖書を、原典において、何ら誤りなき・・・」というのは、本当に本当に、大丈夫なのでしょう。かなり心配です。

皆さんは、「**死海写本**」とか「**死海文書**」（もんじょ）ということばを、聞かれたことがあるのではないのでしょうか。

「死海写本」の発見は、「20世紀最大の発見」と言われました。

この〈世紀の大発見〉の最初は、1947年（昭和22年）のことなのですが、その後20年ほどの間に、死海西岸から、ユダの荒野にかけて、洞窟や廃墟から、古いヘブライ語やアラム語などで、羊皮紙やパピルスなどに書き写された、数万にのぼる、ぼう大な、聖書をはじめとする、古い写本の巻物や、その断片が発見されていったのです。

巻物は、870点。断片は、数万点にのぼりました。

「旧約聖書正典」に属するものは、羊皮紙にきちんと記されていました。そして、発見されたもの全体の約1/4の量を占めていましたのは、「エステル記」を除く、旧約聖書の各書でした。

聖書の各書は全部で、223点ありました。「エステル記」を除き、残りの38巻すべてがそろっていました。

これらのおびたしい文書（もんじょ）を残していったのは、ユダヤ教の主流から離脱して、クムラン地区の岩山を拠点に、世を離れた集団生活を営んでいた、「クムラン・ヤハド」（クムラン共同体）といわれる人たちでした。

一番貴重なものは、「**イザヤ書大写本**」です。保存状態が、最も良い形で、発見されました。

この写本は、預言者・イザヤの書全体を含むものとしては、最古の、完全な写本で、書き記された時期は、何と紀元前2世紀後半から、紀元前1世紀にまで、さかのぼることが出来るものだったのです。イエス・キリストが誕生される100年以上も前のものだったのです。

思い出してください。それまであった最古の旧約聖書の写本は、約1000年前のもの。紀元後930年の「アレppo写本」でしたから、それからさらに1000年もさかのぼった時代に書かれた写本が出てきたわけですから、実に貴重な史料であるわけです。

そして、すばらしいことに、研究の結果、古いヘブライ語やアラム語を使っていますが、内容は、現存する中世の旧約聖書写本の「アレppo写本」や「レニングラード写本」と、ほぼ同じものであることがわかったのです。

今、私たちが手にしている旧約聖書がもとにしている「マーソーラー本文」（ほんもん）が、信頼すべきものであることが立証されたのです。

発見されました「イザヤ書大写本」をはじめ、貴重な写本群は、現在、エルサレムにある、〈国立イスラエル博物館〉の「古文書館」・死海文書が収められていた壺の蓋をかたどって造られた「古文書館」に、収蔵・展示されています。

さて、テモテが、幼い頃から読み、親しんできた「聖書」がどのようなものだったのか、という

ことを見てきているのですが、テモテのお父さんは、ギリシャ人でした。

皆さんは、新約聖書の原典は、ギリシャ語で書かれた、ということを知っておられると思います。でもどうして、ヘブル語ではなくて、ギリシャ語でなんか、書かれたんですか —— と思いませんか。

ヘブル人(びと)の中のヘブル人、と自分のことを言っているパウロでさえも、ギリシャ語で書いているのですから、一体どうなっているのでしょうか。

皆さんは、「使徒の働き」の6章1節に、次のようなみことばがあったことを、思い起こされませんか。

「そのころ、弟子たちがふえるにつれて、ギリシャ語を使うユダヤ人たちが、ヘブル語を使うユダヤ人たちに対して、苦情を申し立てた。彼らのうちのやもめたちが、毎日の配給で、なおざりにされていたからである。」—— というのです。

ギリシャ語を使うユダヤ人たちと、ヘブル語を使うユダヤ人たち。これは、一体どういうことでしょうか。

ペルシャ帝国以降、世界は、非常に急速に変化していきました。

そして、ごくわずかの例外を除いて、ヘブル民族の古代の言語は、忘れ去られていきました。

ユダヤ人は、多くの異なった国々に住んでいました。

ローマ帝国の時代までには、エジプトのアレクサンドリヤに住むユダヤ人の数だけでも、エルサレムに住むユダヤ人の数をしのぐほどに、なっていたほどだったのです。

そして、彼らのほとんどは、当時の共通語になっていたギリシャ語を話すようになっていました。

「使徒の働き」の21章で、エルサレムの町が、パウロたちのために、大騒ぎになって、兵営の中に連れ込もうとした千人隊長に、パウロが、ギリシャ語で、「ひと言お話ししても、よいでしょうか。」と尋ねますと、千人隊長は、「あなたは、ギリシャ語を知っているのか。」と言っています。

パウロはちゃんと、ギリシャ語が話せたわけです。

ペルシャ帝国、ローマ帝国を経て、いろんな国が属国とされていく中で、今の英語以上に、共通語が必要で、それがギリシャ語だったのです。

ユダヤ人たちも、古い言葉のヘブル語よりも、生活のためには、より有効なギリシャ語で話すことの方が、中心になっていったわけです。

皆さんは、「**70人訳聖書**」という言葉も、聞かれたことがあるのではないのでしょうか。

写本の形ですが、ヘブル語の旧約聖書はあったわけですが、以上のような理由から、ヘブル語の旧約聖書を、ギリシャ語に訳す必要が生まれてきました。

ギリシャ語を話すユダヤ人の方が多くなっていく中で、紀元前200年頃、「70人訳」として知られているギリシャ語訳の旧約聖書が作られていきました。そして、旧約聖書は、広範囲にわたって、ギリシャ語で読まれるようになっていったのです。

したがって、初期のクリスチャンたちが読んだ旧約聖書はというと、ヘブル語聖書とともに、70人訳のギリシャ語聖書だったのです。

というようなわけで、「新約聖書」は、ユダヤ人たちのためというよりは、ローマ・コリント・ガラテヤ・エペソなど、多くの異邦人たちのために記されたものですから、もともと、最初から、共通語のギリシャ語で書かれていったわけです。

テモテのお父さんはギリシャ人。お母さんはユダヤ人でしたから、おそらく、お母さんもギリシャ語を使うユダヤ人だったと思われますし、日常会話は、ギリシャ語だったと思われます。

テモテが幼いころから読み親しんできた聖書というのは、この頃はまだ、新約聖書は成立していませんから、七十人訳のギリシャ語の旧約聖書だったと思われます。

「**聖書**」は、私たちに神の言葉を語ります。

私たちは、聖書の言葉から、神の言葉を聞きます。神のみこころを知ります。

私たちは、生きている時も、また、いつか、死を迎える時にも、人間の言葉にではなく、ただ神の言葉にのみ、依り頼むことができます。

聖書の豊かな宝の中から、いつも、答えを得ることができます。

主なる神は、聖書記者たちを、聖霊によって満たし、導き、彼らが正確に、神のみこころを書き記すようにされました。

聖書はすべて、神の靈感によって、記されていったものです。

〈靈感〉とは、神の息吹き（いぶき）のことで、聖霊の導きと守りによって、聖書は形づくられていきました。

イエス・キリストは、「天地が滅びうせない限り、律法の一点一画でも、決してすたれることはありません。」と言われました。

聖霊は、一言一句に至るまで、聖書記者たちを導かれました。

神は、すべての人に、自然や歴史や、一人一人に与えておられる良心・良い心を通して、神の存在を明らかにしておられます。しかし、それだけでは、神が備えられた救いの道を、知ることはできません。

そこで、特別啓示として、「聖書」を私たちに与えてくださり、聖書によって、私たちが、救いに必要かつ十分な知識を得ることができるように、してくださったのです。

聖書全体は、神の愛が、イエス・キリストのゆえに、私たちに向けられていることを明らかにしています。

聖書が記され、私たちに与えられたのは、イエスが神の子・キリストであることを、私たちが信じるため、また、私たちが信じて、イエスの御名によって、永遠のいのちを得るためです。

このことが、聖書全体の重要点・テーマです。

「日本福音自由教会」の〈信仰簡条〉

[第1条] 旧新約聖書を、原典において、何ら誤りなき、靈感された神の言（ことば）であり、人間の救いについて、神のみこころを完全に啓示し、すべてのキリスト者の信仰と生活の神的、究極の権威であることを、信じる。

アーメン

「あなたがたが新しく生まれたのは、生ける、いつまでも変わる事のない、神のことばによるのです。

「神のことばは、信じているあなたがたのうちに、働いているのです。

「神のことばは生きていて、力があり、両刃の剣（つるぎ）よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髄の分かれ目さえも刺し通し、心のいろいろな考えやはかりごとを、判別することができます。

「私は、あなたのことばを、心にたくわえました。

みことばを、どんな宝よりも楽しんでます。

みことばは、喜びです。それは、私の愛するものです。

みことばを、待ち望んでいます。みことばを慕って、絶え入るばかりです。

みことばが、私の喜びでなかったら、私は自分の悩みの中で、滅んでいたでしょう。

みことばは、一日中、私の思いとなっています。

あなたのみことばは、私の足のともしび、私の道の光です。

私たちも、テモテのように、「聖書」を愛し、日々親しんで、そして、みことばを読んだり聞いたりするだけではなくて、みことばを実行するものとされて、主なる神から祝福される者となりたいと思います。

ひとこと、お祈りをいたしましょう。

私たちに「聖書」を与えてくださった、主なる神さま。

私たちが、日々聖書に親しんで、聖書を通して知恵を与えられ、教え・戒め・矯正・訓練をいただき、あなたのために、ふさわしい、十分に整えられた働きができる者と、なっていくことが出来ますように。

私たちの主、私たちの神であられる、イエス・キリストの御名（みな）によって、祈ります。

アーメン